



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 99
Issue Date	1937-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77658
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part34.pdf



[Instructions for use](#)

亭書屋談叢

此頃一週間ばかり微恙の爲に床の内て過したが、夕方近く熱が出る時を除いては大した苦しみもないので、餘り堅くない本を次ぎ／＼に漫讀する事が出来た。その内には詩や小説の外に民俗學者等の調査報告もあつた。

さう云つたら民俗學者には叱られるかも知れぬけれども、私には今日あるがまゝの民俗學は科學と藝術の云はば中間的存在であるとの科學と云ふには未だ距離が幾分ある様に思へるのである。然しそれは決して民俗學を輕蔑する意味では少しもなく、民俗學の存在理由を私は充分に認めて居るのみならず私には最も親しみのある學問の一ツで、詩や小説の様に強い誘惑さへいつも感じて居る。

以前には考古學もそんな學問で、云はば科學以前の學問であつたが、今では随分洗鍊されて、方法上の約束も可成り統一され整備されて來た様である。私の考古學に對する尊敬は昔も今も變らないのであるが、それでも親しみを餘り持てなくなつて來た事は事實である。つまり以前は萬人に開放された學問であつたのだが今日では餘りアカデミックになつて來たので、もう門外漢には近づき難くなり、遠望される象牙の塔として冷たい威壓さへも感じさせる様になつたのである。

民俗學はまだ明らかに萬人に開放されて居る。そして民俗學の結果に於いて、云はば農村の學であつて、農村こそ其實驗室であり書庫である。されば農村に關心を持つ人は功利的な意味からも民俗學に全然無關心である譯にはゆかないであらう。殊に民俗學の最近の業績の内には、生きた農村の動きを巧みに描き出して居るものが多い。

私が今度病床で讀んだ民間傳承の會の「山村生活の研究」は民俗學の最近に於ける恐らく最大の收獲であらう。これは柳田國男氏を中心とする二十人餘りの人々が全國六十六ヶ所の山村を手分けして滿三年の間に調査して廻つた結果の報告である。この種の調査でこんな大掛りの調査は未だ曾て見なかつた事であると共に其調査の事項が随分新鮮なものが多い。民間傳承の個々の事項が取扱はれて居る外に「村の大事件」「暮しよかつた時」「家の盛衰」「亡びた職業」「村に入り來る者」「ほめられる男女」「仕合せの良い家、人」等の項があつて、これ等の事項について有り餘りの儘の事實が報告されて居る。事實は小説よりも面白いとよく云はれて居るが、讀んで行く内に文字通りそんな感じがする。興亡浮沈定めなき人生の姿を、佛者の教訓や詩人の咏嘆としてではなく、科學者として其事實を直截に示して居る。だが其事實を讀んで詩を感じない者はないであらう。

よ所をルも事そをいる今世の者が理白て於るのる日で讀むべし